朝日新聞　２０１６年１０月１５日　朝刊　１ページ　東京本社

天声人語

ボブ・ディランのしわがれ声は聴けばすぐ分かる。村上春樹さんが小説で、登場人物の女性に語らせたことがある。「まるで小さな子が窓に立って雨ふりをじっと見つめているような声なんです」（『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』）▼物語の最後で、ディランの「はげしい雨が降る」が流れる。〈それで　ひどい　ひどい　ひどい　ひどい　ひどい雨が降りそうなんだ〉（片桐ユズル訳）。言葉とともに、悲しく美しいメロディーが訴えかける曲だ▼1962年、キューバ危機によって核戦争が現実味を帯びるなか作られた。ディランは後のインタビューで、「この先、もうあまり長くないかもしれない」という切迫感を持ちながら書いていたと述べた。「あと何曲書けるかわからないと思った」▼ノーベル文学賞が、ディランに贈られることになった。米国の伝統的な歌に、新たな表現を作り出したという。作詞を超えた何かがあった。詩をむさぼり読んだ、多くの詩人に影響を受けたと、ディランは語っていた▼反戦や反権力の歌で知られるが、それは彼の一部である。ある歌のことを「霊が書いたような感じだ……霊がぼくを選んであの歌を書かせた」と語ったことがある。愛を歌い、神への気持ちを歌った▼子どものころディランの1枚のアルバムを、繰り返し聴いたことがある。わずか数分の歌がこれほど、心に響く物語を紡げる。それを教えてくれたのが彼だった。今もう一度、彼の言葉に浸ってみたい。

2016・10・15

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。